

## 論文審査の結果の要旨

氏名：粕谷 光

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：野呂邦暢の文学的磁場—故郷喪失と自衛隊体験—

審査委員：（主査） 教授 佐藤 洋二

（副査） 教授 山本 雅男 教授 堀 邦維

本論文は、作家野呂邦暢を本格的に扱った論考としては、郷土出身作家の評伝という形で書かれた中野章子の『彷徨と回帰—野呂邦暢の文学世界』（西日本新聞社）以外には前例がない。無論、粕谷氏も事実関係の多くを中野の著作に依拠しているのは当然であるが、野呂文学の特性を扱うことに主眼を置く本論文では、野呂の諸作品を中心に据えながら、それ以外の関連資料を丹念に当たるしか方法がない。本論文からは、そのような地道な作業を熱心に遂行した跡が、明瞭に見て取れる。とくに様々な新聞・雑誌に発表した膨大な数の野呂自身のエッセイ、自伝的文章、他の作家との対談、往復書簡、さらには、同時代の作家・批評家・研究者など多様な書き手による批評や論文に当たることで、野呂邦暢の文学の全体像をとらえようと試みている。その作業を通じて、粕谷氏は、これまでにはなかった、独自の着想を獲得し、それに基づいて意欲的で独創的な野呂論を作り上げた。

第一章では、野呂の幼少期から青年期までの体験がいかに彼の文学の原質を形成していったかを、考察している。一つは、諫早から目撃した生まれ故郷長崎への原爆投下であり、もう一つは、彼の第二の故郷である諫早における大水害である。粕谷氏は、この二つの体験をともに「喪失」と呼び、野呂文学の底に横たわる重要な要素ととらえている。

長崎原爆は文字通り故郷の物理的破壊で、そこには幼い級友たちの死も伴っていた。諫早大水害は、彼の感性と存在の在りようを育んだ環境の喪失である。それは洪水によって町の景観が失われたというだけでなく、水害後の復興にともなう人口増加と都市化によって野呂の「原風景」が喪失したと、粕谷氏は考える。論文中の言葉でいえば、物理的喪失と記憶的喪失という「二重の喪失」である。

第二章では、野呂の手法上の問題を扱っている。野呂はデビューして間もないころ、「新しい文学」と称して、新たな小説の手法を模索していた。このことは、同僚作家長谷川修との『往復書簡集』のなかで明らかにされているが、絵画や映画の手法、数学や物理学の理論の文学化など様々な試みについて二人で議論していたことがうかがわれる。このような手法の模索の一つの結果が、野呂が何作か残している「歴史小説」であるとする。

しかしそれよりはるかに重要なのは、「草のつるぎ」である。この作品は、芥川賞を受賞したことによって、野呂邦暢の名を世間に知らしめたが、粕谷氏は、この作品によって、野呂の小説の書き方が変化したことに注目した。それは、「鳥たちの河口」に代表される、風景描写と心理描写に富んだ作品の技巧から、自衛隊という社会的なテーマ性への転換といってもよい。つまり、かねてよりなされてきた手法上の模索が、このような変化を生み出したという見方を取る。実際、当時の批評の中には、この転換を取り上げるものも少なからずあった。だが、粕谷氏は、それを表面上の変化であるとし、「作品の主題はあくまで自己探求と自己発見である」と論じた。

第三章は、「草のつるぎ」に対する当時の文学界の一般的な反応と評価を扱っている。「草のつるぎ」は、自衛隊を初めて扱った文学作品ということで、その素材の新奇さが、文学界のみならず、世間の耳目を集めた。この作品が発表されたのは、1973年である、つまりまだベトナム戦争の真最中ということもあり、60年代後半から連なる反戦運動や反安保運動の余波のなかにあった。論壇のみならず、文学界までもがこのような政治的文脈を無視するわけにはいかなかった。そのような中での芥川賞受賞である。当然、次の

ような疑問が呈される——「この作者が自衛隊の是非についてどのように考えているのか」（小田実）。

粕谷氏は、この作品の成立の事情を調べるため、野呂が執筆当時居住していた諫早を訪れ、取材している。なかでも、諫早市立諫早図書館に所蔵してある野呂自身がクロッキーブックに書いた草稿ないしは構成図を入念に調査し、野呂が作品をどのように構想したかを探った。その一部は、粕谷氏自身が写真撮影しており、本論文に収録されている。そこで明らかになるのは、自衛隊という隔絶された社会における、一人の若者の自己放棄から自己発見そして自己受容に至る道程である。野呂はクロッキーブックにこう書いている、「おれは死なない、生きるためにはどんなことでも——と決意する」。

野呂が実際に自衛隊にいたのは1956年からの一年間で、当時はまだ自衛隊の是非の問題は、安保問題にくらべると大きな比重を持たなかった。したがって、野呂自身の自衛隊体験を政治的文脈で捉えるのには無理があると、粕谷氏は考える。さらに、多くの批評家が行ったような、戦中戦後の戦争文学との比較もさほど重要な意味を持たず、むしろ「自己破壊から自己受容というテーマ」こそが、野呂文学の本髄であると結論づけている。

第四章では、野呂の家族の問題と作品との関連を細かく検討している。とくに、父との不和、妻と愛人との確執、離婚など、野呂の実生活上の諸問題が、後期の作品に色濃く陰を落としている点に着目し、分析を試みている。このような視点からの論考は、これまでほとんどなされたことはなく、注目されてよい部分の一つである。

本論文は、個々の作品に見られる様々なモチーフと諸要素を手際よく取扱い、それらを上記のような視点から見直すことによって、野呂文学の特性を見事に描き出したと言える。さらに、終章において、内向の世代と総称される作家たちとの比較にまで及び、彼らとの類似性と差異に言及しているが、このことは、粕谷氏が今後、野呂文学を起点に日本文学史的視野を獲得していく端緒を示唆しているとも受け取れる。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 27 年 2 月 10 日